

関満博編著『沖縄地域産業の未来』

(新評論、二〇一二年、四二七頁) を読んで

土屋 純

本書は、沖縄の地域産業の現状と未来について、琉球・沖縄の歴史過程をふまえながら展開しているものである。沖縄の地域産業のさまざまな現場が具体的に紹介されており、変わりつつある沖縄の地域産業を理解することができる。編著者である関満博氏は、産業論、中小企業論、地域経済論を専門とし、国内だけでなく中国を中心としたアジアにもフィールドを広げ、地域産業の実態について現場でのインタビューを基として議論している。特に、モノづくりに関する洞察力に長けており、各産業について正確な現状把握をおこなうだけでなく、今後の可能性についても提示できる論客である。この関満博氏が沖縄の地域産業に注目した著作を公刊したのをふまえ、本書による沖縄の地域産業の現状把握についてみるとともに、産業論から沖縄を理解することの意味について考えていきたいと考える。

1. 沖縄地域産業の現状

沖縄においてモノづくり産業が発展しなかった理由として、①戦後の占領政策の中で基地建設が最優先され、モノづくり産業を育成する基盤がなかったこと、②離島ゆえに域内市場が小さく、規模の経済性を追求するモノづくり産業が発展する余地

に乏しかったこと、③輸送費負担が大きく本土市場に進出(移出)する条件にかけていたこと、の三点を挙げている。このように、二〇世紀後半においてモノづくりの基盤が形成することが出来なかったことが、現在の沖縄が置かれた状況を作り出している。

しかし近年、沖縄ではさまざまな地域産業の新たな動きが活発になっている。食産業を中心として起業が増えてきており、その動きは沖縄本島だけでなく、宮古島、石垣島にも広がっている。そして、観光産業の多様化も進んでおり、開発志向とは異なり地域資源を生かすような観光地づくりもみられるようになった。さらにここ数年の動きとして、東日本大震災後、様々な企業の製造機能が沖縄に移転するようになってきているが、本土からはなれた沖縄の同時地震発生は考えにくいことから、リスクヘッジする場として沖縄が注目されているのである。

本書では沖縄産業の可能性として、①経済が活性化しているアジア、中国からみれば日本の前衛の位置にあること、②琉球大学をはじめとしていくつかの大学があり、優秀な人材が豊富であること、③沖縄独特の文化、おもてなしの「こころ」という資源があること、の三点を指摘している。一九九〇年代以降、日本のモノづくりが停滞する中で、東アジアや東南アジアの経済発展によって、東アジアの経済の重心が西に移動している。全日空が「国際貨物羽生事業」として、那覇空港を拠点に、国内は成田、羽田、関空、海外はソウル、上海、台北、香港、バンコクをつないでいるが、沖縄はアジアとのネットワークの

点で優位になりつつあるのである。

近年のモノづくり産業の立地は「人材立地」といわれている。バブル経済崩壊以降、日本本土では人口減少、高齢化が具体的に実感され、一方、東アジア諸国地域の存在感が高まるにつれ、従来のような大量生産による輸出加工型展開は過去のものとなり、さまざまな人材の能力を生かすような産業のあり方が必要となっている。その点において沖縄は、地方圏において人口増加している数少ない県であり、合計特殊出生率も高く、一五歳未満の年少人口割合も日本一である。さらに、沖縄の人材の特徴として、著者は「地域への愛情の深さ」を挙げており、地域を愛し、地域のために全精力を投入し、具体的な活動を押し進めている人材が多いことも指摘している。さらに、沖縄の特徴として女性起業家が多いことも注目すべきであり、農村部では女性らしい気遣いで地域の資源を掘り起こし、新たな事業にしていくものが存在している。紅芋タルトで有名な「お菓子」のポルシェ（御菓子御殿）は読谷村の女性起業家によって事業として成功した事例であり、沖縄の多くの女性を勇気づけたという。

さらに、地域資源をベースにする産業化への関心が高まっている。沖縄は、その独特な地域資源に恵まれており、「自然と人々の歴史」「食と生活様式」の面で沖縄の独自性が存在していると指摘している。「自然と人々の歴史」に関しては、太陽の輝きと珊瑚礁の紺碧の海は、観光資源として重要である。厳しい紫外線と激しい台風に悩まされることも多いが、その紫外

線の強さによって沖縄の植物には機能性物質が凝縮されており、ウコンやセンダンなどその効能面で注目すべき食材が多い。沖縄の独特の自然環境が生み出す植物は、全国的な健康志向を相まって、沖縄の食産業の可能性を高めるものとして注目されている。

「食と生活様式」に関しては、亜熱帯に位置づけられる沖縄には、さまざまな食材を生かした独特の料理が存在しており、自然と人々の暮らしが一体化している。伊江島の民泊事業であるが、小さな島に三万人以上の若者がやってきて、自分を振り返る機会としている。受け入れる全国の中高校生に対して特別なことをしている訳ではなく、農業や漁業、商業などのありのままの生活体験を提供している。さらに、高齢者を中心とした人々は訪れた生徒を家族として受け入れている。沖縄の歴史と文化によって醸し出されてきた「人々のおもてなしの心」が、伊江島の「ヒューマン・ツーリズム」として結出している。

また、沖縄は日本の辺境という条件不利の中で苦しんできた。その条件不利への反発のエネルギーが大きいことも、近年の沖縄の変化に結びついている。沖縄本島以外の離島において観光と食産業が結びつく動きが見られるようになってきている。例えば、宮古島の雪塩や、石垣島の食べるラー油など、離島から全国レベルに販売しうる食産業が生み出されている。そうした活動を生み出してきたのは在住の島民だけでなく、Uターン者、Iターン者も加わっている。Uターン者、Iターン者は、彼ら自身、厳しい消費者であり、実に興味深い食品が新たに開

発されている。多様な「人びと」の存在そのものが最大の資産となっているのである。

また、沖繩として本土への売り込みも盛んに行われている。①いかに沖繩に観光客を呼び込むのか、②いかに沖繩の商品を本土に売り込むのか、移動・輸送コストという悪条件を乗り越えようと努力している。その例として、本書では㈱沖繩県物産公社の活動を紹介している。「わしたショップ」というアンテナショップだけでなく、本土の販売先への卸売りや物産展への積極的な参加をおこなっていることを紹介している。

2. 沖繩地域産業の可能性とは

二〇一二年五月、沖繩県では『沖繩二一世紀ビジョン基本計画』を作成した。二一世紀において振興すべき産業として、①ウエルネス産業、②IT産業、③感性・文化産業、④物流・臨空関連産業、⑤環境エネルギー産業、の五点を指摘している。沖繩の地域資源や豊富な人災を最大限生かすべく産業振興を進めようとしており、そしてこの五つすべてが観光産業と結びついているのも沖繩の特徴といえよう。

沖繩の観光資源には、世界遺産、ユニークな食文化、独特の民族音楽・芸能、独特の工芸品など、さまざまな可能性が存在している。数百戸しか住民がいないような離島でも、夕べになるとどこからともなく三線の音色が聞こえてくるほど、生活に密着する形で芸能が存在していることが沖繩の特徴であると指摘している。琉球には昔から良いものは海から入ってくる

る歴史があり、沖繩の人々には新しいものに対する受容性が高い。自国の文化水準を高めることで民族の誇りを高め、精神的な優位を気づくことで負けない戦争を心がけた歴史が存在している。そのことが、人々が芸能を楽しむ文化が形成されたと本書では指摘している。

このような文化の奥深さについて、『沖繩二一世紀ビジョン基本計画』では「③感性・文化産業」として位置づけ、新産業として成長させようとしている。工芸品、美術・骨董品、織物、出版物などのほか、芸能、音楽、映像、ファッション、デザイン、食文化、空手など、生活者の感性に訴える商品・サービスを創出産業「沖繩感性・文化産業」と位置づけているのである。

そして本書では、沖繩が克服すべき課題として金融の問題についても展開している。一九七二年に日本に復帰した当時の沖繩経済は、本土が経済大国となる礎を固めた高度成長期を經過らず、資本蓄積が進んでいない状況であった。民間金融機関をそろえるだけで沖繩の資本不足が解消されることはなかった。沖繩に特化した政府系金融機関として沖繩振興開発金融公庫が創出され、本土では脇役であった政策金融が沖繩の資本不足を補うこととなった。このように、沖繩県では政府系金融機関の役割が大きく、民間によってリスクを伴う資本融資、たとえばベンチャー支援など、が小さくなっている。今後、民間の資金を産業振興に生かしていくのか、大きな課題となっているのである。

3. 産業論から見えてくる沖縄

このように本書は、沖縄人でない研究者によって沖縄が観察され、その可能性と課題を客観的に論考したものとなっている。モノづくりが盛んでなかった沖縄に注目し、その地域産業が分析されていることは、グローバル化時代における沖縄の方向性を示しているものである。さまざまな地域産業の現場が詳細に紹介されているが、そのことは沖縄の人々にとっては珍しいことではないかもしれないが、沖縄以外の人々にとって沖縄の可能性が大きいことを改めて認識させることとなるろう。さらに、沖縄の産業振興の可能性を、アジアとの関係から検討していることも興味深い。本書は沖縄の地域産業について考察したものであるが、沖縄と合わせて考えることによって、日本の将来について考えることができることも評価すべきである。